みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# Possibilities of the Ethnography by the Postsoviet anthropologists : Works and productions in the new market economy : Embroidery for dowries, and embroidery for trade : A case of Kashta handiwork in the Shofirkon district of Uzbekistan



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-03-23<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 今堀, 恵美<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.15021/00001259 |

高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』
国立民族学博物館調査報告　78:451-480(2008)



# 持参財を飾る刺繍，販売する刺繍
## ――ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区のカシュタ制作を事例に――

今堀　恵美
東京都立大学社会科学研究科社会人類学専攻博士課程

本論は，ウズベキスタンの刺繍制作を対象とし，ポスト社会主義時代の商品化を通じて制作者たちが刺繍の文化的意味合いや制作を支える倫理規範，価値観に加えた再解釈を分析する。

ウズベキスタンでは手作業で色糸で施す刺繍をカシュタといい，カシュタの装飾品は女性が持参財に準備する手工芸品とされた。かつて見事なカシュタで装飾された持参財は花嫁の価値さえ決める指標とされた。

本論で取り上げるショーフィルコーン地区では，カシュタは「女性が来客をもてなすもの」といった倫理規範から儀礼の贈物として制作されてきた。ポスト社会主義時代，持参財にカシュタを準備する女性は減る一方，外国人向けカシュタ制作業が興盛となり，高学歴の女性たちはカシュタで起業を始めた。カシュタを「女の仕事」とするジェンダー的意味づけが，商品化の過程で女性に特権的な収入源を確保した反面，女性事業家と賃労働者という格差も生み出した。女性事業家たちは制作の対象を「来客」から「顧客」へと読み替え，市場原理に則った制作を促進させた。一方の女性労働者たちは，カシュタの仕事から家事・育児と両立しうる「特別な」収入源を得たのである。

1　序
2　ウズベキスタンにおける持参財と刺繍
　2.1　ウズベキスタンにおける結婚，持参財概略
　2.2　持参財におけるカシュタの位置
3　ブハラ州ショーフィルコーン地区におけるカシュタ制作
　3.1　調査地とカシュタ制作
　3.2　持参財における刺繍装飾の変化
　　3.2.1　カシュタの変遷
　　3.2.2　金糸刺繍，ミシン刺繍の変遷
4　カシュタ制作者達の持参財装飾
　4.1　カシュタチの持参財
　4.2　カシュタ繍い子の持参財
5　結び

＊キーワード：ウズベキスタン，ポスト社会主義人類学，カシュタ，モノと商品，ショーフィルコーン

## 1　序

1991年にソ連邦が崩壊し中央アジア諸国が独立してから15年以上経過し，社会主義時代を再考する人類学研究が徐々に蓄積されてきた[1)]。中でも英国人類学者マンデルとハンフリー編集で2002年に出版された『市場とモラリティ――ポスト社会主義の民族誌』では，中央アジアも含む旧社会主義圏の市場システム導入で生じた新たな経済活動に焦

点を絞り，（生産手段共有を旨とする社会主義的価値観とは異なる）市場原理に則った利益追求にかつて社会主義者だった人々が示すとまどい，経済活動を支える彼ら独自の倫理規範や道徳性を描写する。旧社会主義圏における市場経済システム導入に関する研究は経済学，政治学，地域研究など多様な分野で論じられたテーマであるが，編者によれば，中でも人類学者がなしうる貢献とは多種多様な普通の人々を対象にした長期間のフィールドワークに基づく，集約的で文脈依存的なアプローチにあるという（Mandel and Humphrey 2002：2）。

市場を分析する集約的で文脈依存的なアプローチとは，経済人類学でいう「モラル・エコノミー」論を踏襲する。それは抽象的で，モデル化されたシステムとしての市場ではなく，具体的なそれぞれの市場の経済活動に焦点を当てる。そして市場原理に則った利益を追求する経済行為のみならず，具体的な個人が従事する様々な経済活動，及び経済活動を支える地域社会独自の価値観・道徳性・倫理規範の解明に特徴がある（スコット 1999）。

社会主義体制の解体に伴う経済格差の拡大や社会福祉の廃止といった大きな社会不安を抱えていた中央アジアでは，モラル・エコノミー論からの視座が日常生活における人々の新たな生存戦略とその背後にある倫理規範を明らかにしてきた（Shreeves 2002など）。その手法は，「計画経済」と「市場」という２つの異なるシステム間の齟齬のみに留まらず，国家助成金の削減，収支計算，リストラ，節約，外国からの人・物の流入といった生活基盤を揺るがす人々の転換経験に注目し，社会変動期に人々が実践した生存戦略を支える道徳性・倫理規範を解明した。

確かに中央アジアを分析するモラル・エコノミー論的な視座は，人々の経済活動の背後にある道徳性や倫理規範といった社会・地域ごとの経済活動の固有性・個別性の解明に貢献してきた。だが，社会内で特定の「モノ」[2] がもつ文化的意味合いと経済活動の関連性，ある社会で経済活動の対象となったモノがもつ固有の位置といった視野からの研究が必ずしも多かった訳ではない[3]。

対して，世界中の様々な事例を基にワイナーとシュナイダーが提起した「布の人類学」では，布とその生産技術・技能が地域社会で文化的な意味をもち，布生産に特有の意味づけや象徴体系があることを解明した（ワイナー，シュナイダー 1995）。布生産にはある特定の価値観・倫理規範と強い親和性があり，その価値観が布の生産や取引といった経済活動にも影響を及ぼすという。例えばザイールのラフィア織物を研究したダリッシュは，織物の生産過程とその使用に高い価値を置かれるからこそ，布には位階や社会的名声といった特定の文化的意味が賦与され，通貨代わりに取引されたと論ずる（ダリッシュ 1995：197）。モラル・エコノミー論のように社会内の経済活動を支える倫理規範を解明するのではなく，布といった特定のモノや生産技術・生産過程に固有の文化的意味合い，特定の価値観が結びつくことで，布の生産・取引という経済活動を支える倫理規範

の内実も形成されることを指摘したのである。

布を始めとするモノ固有の文化的意味合いと経済活動には一定の結びつきがあるとはいえ，ある特定のモノと文化的意味合い・価値観との結びつきは，常に安定した関係にあるとは言えない。グローバリズムとモノの意味づけの変遷に関する議論（Appadurai 2001など）を持ち出すまでもなく，モノに賦与される文化的意味合いや価値観は時代・時期，場所，制度など多様な要因に応じて変化する。だがそうであればこそ，あるモノに賦与された文化的意味合いや価値観の変遷に注目することは，新たな時代・時期，制度を生み出した転換の経験を読み解く鍵になりえよう。

例えば，時代や新制度に沿って人々がモノを意図的に従来の用途と異なる「商品」として作り替える行為では，それ以前にモノと親和性を持っていた文化的意味合い・価値観・倫理規範が見直され，疑問やとまどい，反発，回帰などを取り込んだ再解釈が生み出されやすい（Davenport 1986：108）。それは売買を目的とする商品という異なる文脈にモノが置き換えられた事実ばかりか，商品という新たな文脈にモノを置換させた政治・経済的状況，国家制度，時流までも反映して生み出される人々の再解釈である。このようにモノが商品化される過程[4]を分析する試みは，新たな制度や時代に対して人々が施す再解釈の一端を浮き彫りにする。

とりわけ，ポスト社会主義時代という転換期を分析する手法として「モノと商品」から論ずる意義は，転換期に特定のモノが商品用に再生産され，人々が自らの裁量でモノを生産し取引する新たな経済活動に注目を促す点にある。そこから新たな活動に連動したモノの文化的意味合い・価値観・倫理規範が見直され，その内容を巡って人々が施す再解釈も描写しえよう。市場経済導入後，かつて社会主義者であった人々はモノの生産や取引を支える倫理規範にいかなる再検討を加え，新たな解釈を生み出したのか。この点をつぶさに検証することがポスト社会主義にある中央アジアの一側面を照射すると考える。

本論では，ポスト社会主義時代における「モノと商品」の議論を検証する一例として，ウズベキスタンの刺繍制作を取り上げる。次節から詳述するように，ウズベキスタンの刺繍でもカシュタ（kashta/u）という手繍（ぬ）い[5]刺繍の技能は，持参財装飾としての女性の技能という文化的意味づけと強い親和性をもっていた。

人類学では，持参財（dowry）は研究対象として盛んに取り上げられてきた（Goody 1973；Tambiah 1973，1989など）。花婿及びその親族から花嫁の親族へ財を贈る婚資（bridewealth）と異なり，持参財は花嫁（花婿）が結婚に際して自らの財産として婚家に持ち込む財である。持参財のやり取りは結婚する当事者ばかりか，財の移動により両者の親族集団などより広い社会関係を形成する重要な役割を果たす（Goody 1973：2）。社会関係形成に影響する持参財のやり取りに，当該社会で重宝される貴重品が供されるのも広く見られる現象であり，地域によってはその準備に多大な労力と経済的負担をか

ける（青柳 1981；西村 1994など）。すなわち，持参財に準備するモノには地域社会特有の文化的意味合い，価値観，倫理規範が強く反映されるのである。

ウズベキスタンの刺繍が持参財を飾る技能ならば，そこにはいかなる文化意味合いや価値観，倫理規範と結びついているのだろうか。第2節ではウズベキスタンの刺繍がもつ文化的意味合い及び，価値観，倫理規範を先行研究から検証していく。

もっとも花嫁が準備する持参財としての刺繍装飾という文化的意味の結びつきは，決して連綿と変化なく続いてきた訳ではない。そこで第3節では，筆者が2002年から継続的にフィールド調査するウズベキスタンの一行政地区の事例から，社会主義時代を通じて継続された女性の持参財と刺繍装飾の変化，そしてポスト社会主義時代に外国人向けの土産物を装飾する技能に変化した様子を明らかにする。

第4節では，調査時点で商品用刺繍制作に従事していた刺繍制作者たちによる，刺繍を巡る文化的意味合い，価値観，倫理規範に加えられる再解釈を提示する。特に持参財装飾としてのカシュタの意味合いと商品化への転用を巡って，彼ら／彼女らが刺繍制作を支えてきた価値観への再検討と，新たな文化的意味合い・倫理規範の創出過程に注目する。

## 2 ウズベキスタンにおける持参財と刺繍

### 2.1 ウズベキスタンにおける結婚，持参財概略

ウズベキスタン共和国には複数の民族集団（ethnic group）が居住するが，その人口の約8割をイスラーム・スンニ派（ハナフィー学派）を奉じるウズベク人が占める。1998年に改正されたウズベキスタン共和国家族法第13条には，結婚とは両者が戸籍登録（ZAGS/r）[6] を完了することで法的効力を有し，宗教婚のみでは法的効力がないと明記されている（O‘ME 2003：355）。それでも戸籍登録をした上でイスラーム式の宗教婚に地域固有の習慣を組み込んだ民族的（ミッリー，milliy/u）スタイルの婚礼を挙げるウズベク人が多い。民族的スタイルの結婚には様々な段階があり[7]，中でも花嫁とその親族が準備した豊富な持参財で新婚夫婦の部屋一面を飾る光景は人目を引く。イスラーム式の婚姻を1980年代のエジプトで調査した大塚は，入れ物としての家屋を男性が用意し，（家屋の）中に入れる家具を女性が持参財として準備することを指摘した（大塚 1985：294-295）。この特徴は現在のウズベキスタンにおける民族的スタイルの婚姻でも基本的に同様である。

だが他のイスラーム諸国と異なり，旧ソ連圏では1920年代頃からソ連政府の支援を得てあらゆる「封建的段階」にある民族の文化を，マルクス主義的な発展段階論における「社会主義段階」へ直接発展させる必要があるとされ，その一環として婚資や持参財が「封建的文化」の象徴として廃止された地域もあった（Hirsch 2005：223）。

中央アジアにおいては，19世紀末頃からムスリム知識人を中心に教育改革に取り組んだジャディード運動，1920年代にソ連政府が主導した女性解放運動であるフジュム運動まで，男性が女性の父親に支払う婚資（カリン，qalin/u）が批判対象となり，廃絶に向けた運動が繰り広げられた。その理由は，イスラーム法に則った結婚契約金（マフル，mahr/a）が女性本人に支払われるのに対し，カリンが中央アジア地域特有の「男性が女性の父親から娘を購入する金」であり，貧しい家庭ではしばしばカリン目当てに父親が娘を売る悪習の根源とみなされたからである（Kamp 2006：45–46；Oliver 2000：79）。

ところが女性が結婚後も所有権を有する持参財（セプ，sep/u）は，むしろ女性にとって結婚後の安定した生活を保障する財産とみなされ，ソ連時代を通じて継続された。その背景にはウズベク社会が夫方居住であり，与妻者側が新生活に必要な家具や生活用品，服飾品を持参財として準備する習慣があった。ソ連時代を経て現在まで継続されたウズベキスタンの持参財が，いかなる文化的意味合い・価値観・倫理規範と結びつきがあったのかをウズベク人の民族学者ボリエフの研究から整理してみよう。

ボリエフは「（ウズベク社会の：筆者註）持参財とは，花嫁の両親が花嫁に準備する品物であり，花嫁の生活必需品である服飾類，家具類，日用品など」と述べる（Bo‘riev and Xojamurodov 2006：114）。ウズベク社会では，予め受妻者側から与妻者側に渡される贈物[8]に与妻者側が上乗せして娘に与え，花嫁はその財を婚家に持ち込む「間接持参財（indirect dowry）」（Goody 1973：20）が含まれる。婚入後，間接持参財を含む持参財の財産権は名目上でも花嫁自身が有するため，花嫁及びその親族は持参財に準備する品物を慎重に選ぶ。ゆえに花嫁の持参財は花嫁自身の人柄，技能を計る指標とされた。

「持参財のある嫁が価値ある嫁（sepli kelin epli kelin/u）」や「嫁が来たら持参財を見よ（kelinni kelganda sepni yoyganda ko‘r/u）」などのウズベク語慣用句を引用し，ボリエフは花嫁の婚入後に催される「持参財お披露目」（sep yoyish/u）儀礼の重要性を指摘する。「（花婿側の親族及び近隣の：筆者註）女性達は儀礼で花嫁が持参した品物を検分する。そして持参財の数が多ければ褒め称え，少なければ物笑いの種にした。花嫁の持参財の多寡が花婿の家族の沽券に関わった」。さらに持参財お披露目儀礼で持参財を衆目にさらすために「未婚女性は儀礼に向けて手作りで持参財を準備した」（Bo‘riev and Xojamurodov 2006：114–115）という。

お披露目儀礼では持参財の量に加え，質の高い手芸品を披露して受妻者集団に「価値ある嫁」と評判の高まった女性は，婚出先の親族たちから敬意をもって迎えられ，安定した結婚生活を送れた。従って，与妻者集団は娘をより「価値ある嫁」にしようと持参財に質の高い手芸品を準備した。

ボリエフの見解をまとめると，持参財がもつ文化的意味合いとは，花嫁を迎え入れた花婿側の家族，女性親族さらには近隣の年配女性といった，婚入後花嫁が日常的に接す

るはずの女性たちが，花嫁の持ち込んだ豊富で，素晴らしい持参財，中でも花嫁の手芸品とその技能を目にすることで，新たに婚入した花嫁の人柄を伺い，彼女が「価値ある嫁」か否かを判断する重要な文化的指標であった。

## 2.2 持参財におけるカシュタの位置

花嫁及びその女性親族が準備する持参財の品物は，家具から食器といった生活用品まで様々な品物が地域特色及び各家庭の経済事情を勘案しつつ準備される。ボリエフが重視した持参財の手工芸品には礼服，布団，座布団，クッション，壁掛け，腰巻き，礼拝用敷物を始めとする仕立物がある。近年ではボリエフが重視した花嫁手作りの持参財は徐々に既製品に置き換えられつつあるが，かつては確かに持参財に手工芸品が重視されていたと伺える証拠がある。それが19世紀を中心に花嫁の持参財として制作され，現在まで残る素晴らしい手繍い刺繍の数々である。当時，持参財の仕立物に美しい色糸でカシュタを施す装飾品は，花嫁が必ず準備する持参財であった。19世紀のカシュタ装飾品は，その類い希な装飾性から多くの研究者の注目を集めてきた（Sukhareva 1937; Tarasov 1957, 1958; Chepelevestkaya 1961; Yunusova 1986; Gul 2002; Jumaev 2003）。その中から19世紀のカシュタ制作がいかなる価値観・倫理規範に支えられてきたかを紹介しよう。

民族学者スーハレヴァは19世紀後半から20世紀初頭のサマルカンドで制作されたカシュタの装飾品を分析した論考を著した（Sukhareva 1937; 1983; 2006）。1880年以前のサマルカンドでは，花嫁が手織りの布地に草木染めの色糸を用いてカシュタで装飾された４種類の持参財 —— 壁掛け（ベットカバー），婚礼用シーツ，クッションカバー，礼拝用敷物 —— を１，２組用意せねばならなかった。スーハレヴァによれば，唐草模様や唐辛子・刃物といったモティーフがカシュタで施された持参財には，結婚後40日間まで花嫁は呪術の攻撃の対象になりやすく花嫁を狙う邪視や悪霊から身を守る重要性があったという（Sukhareva 1937: 122）。カシュタは花嫁の評判を高めると同時に，花嫁を守る聖なる力をもつ貴重品とみなされていた。

ブハラ州のカシュタを研究したジュマエフは，19世紀の持参財に見られる多種多様なカシュタの品々を記している（Jumaev 2003: 115-139）（【表１】参照）。

【表１】 19世紀後半から20世紀前半のブハラ州のカシュタ持参財

| 制作品目 | | | | 説明（サイズは cm） |
|---|---|---|---|---|
| 分　類 | 表2番号 | 日本語訳（説明） | ウズベク語 | |
| 家庭用品 | ① | 壁掛け | палак сўзана | 約150×250の壁掛けの他，ベットカバー，布団台カバーなど多様な使い道がある。 |
| | — | 壁掛け(170×120) | ним сўзана | |
| | — | 布団カバー | буғжома | 布団を畳んで上にかけておく。 |
| | — | 布団台カバー | такияпўш<br>болишитпўш | 布団台とは衣装ケースの上に布団を重ねて積んでおくもの。大抵はウズベク家屋の入り口付近に配置される。その目隠しとして用いる。 |
| | ② | クッション（枕）カバー | ёстиқ болинпўш | クッションの脇の部分に飾りを付ける。 |
| | ③ | 炬燵カバー | сандалпўш | |
| | ④ | 鏡入れ | ойна халта | |
| | — | 櫛入れ | тароқ халта | |
| | — | 押入目隠し | чойшаб | |
| | ⑤ | 横長梁飾り | зардевор | 細長い布地に装飾を施し，天井の近くの梁を横に飾る。 |
| | — | 押入目隠し(縦長) | дарпеч<br>кирпеч | チョーイ・シャブの真ん中に縦に飾る。 |
| | — | 包丁ケース | қин | |
| | — | ブックカバー | муқова | |
| | — | ボディタオル | танпокун | 両端に刺繍を施す。 |
| | — | 書類入れ | юзгир | |
| | — | 風呂敷 | бухча | |
| | ⑥ | 礼拝用敷物 | жойнамоз | 約70×100の布地にムスリムの礼拝の方角を表す凹型の装飾を施す。 |
| 結婚用品目 | — | 結婚用カーテン | чимилдиқ ғўшанда | 花嫁が花婿の家に入った後，部屋の一角にカーテンを引き行う儀礼に用いる。 |
| | — | 新婚用布団カバー | жойпўш | |
| | ⑦ | 婚礼用シーツ | рўйжо бистарпич | 約150×280の布地の縦の一方に約30cm程度の飾りを施す。 |
| 馬　具 | — | 鞍飾り | зинпўш | |
| | — | 馬飾り | даури | |
| 男性用衣服 | — | 円錐形帽 | кулоҳ | 縁はなく周りに布地を巻いてターバンの中心にすえる。 |
| | ⑧ | 腰巻き | белбоғ<br>чорси<br>қийикча | 葬式などの儀礼の時に腰に巻く。約70四方正方形の布地の一角に刺しゅうを施す。 |
| | — | 戦用服 | шоливар | |
| | — | 上着 | яктак | |
| | ⑨ | 礼装用長衣 | жома | 生地は薄手の素材で縫われる。女性用に比べ身頃が広くデザインされている。 |
| | — | ブーツ | махси | 底が柔らかな素材になっている。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 男女用衣服 | ⑩ | 礼装靴（男女） | ковуш | スリッポン型で先が尖っており，かかとがある。 |
| | ⑪ | 縁なし帽（男女） | дўппи | |
| 女性用衣服 | ⑫ | ベスト | нимча | |
| | ⑬ | 袖飾り | енг | |
| | ⑭ | 裾飾りリボン | жияк | 細いテープ状に飾りを作り，ズボンの裾につけて飾る。 |
| | — | 女性用帽子 | култапўшак | 縁なし帽の後方部に布地が付いている。 |
| | — | 女性全身用ベール | паланжи | 頭から全身に被る布地。前打ち合わせと裾の部分に刺しゅうが入る。後部には2本の飾り帯がついている。かつてはその下に黒の網状になったチャチヴォーンをつけて顔を隠した。 |
| | ⑮ | 女性用スカーフ | рўмол | 部分刺繍。 |
| | — | 花嫁用ベール | сарандоз | 部分刺繍。 |
| | ⑯ | 襟飾り | пешкурта | 細いテープ状に飾りを作り，襟から前打ち合わせ部分にまで飾りを付ける。 |

※表は Jumaev 2003（p. 115-139）を元に筆者作成
※ウズベク語の名称の多くはタジク語の単語が含まれる。ブハラ州には多くのタジク人が暮らしており，その影響は大きい。

カシュタの装飾品は簡潔な仕立てゆえに，布地の寸法，デザイン構成に応じて種類の多様性が生み出される。例として①壁掛け【写真１】，⑥礼拝用敷物【写真２】，⑦婚礼用シーツ【写真３】のデザイン構成を取り上げよう。

【写真１】 壁掛け
2003年　ショーフィルコーン地区　筆者撮影

【写真２】　礼拝用敷物
2003年　ショーフィルコーン地区　筆者撮影

【写真３】　婚礼用シーツ
2003年　ショーフィルコーン地区　筆者撮影

上記３品とも数枚の細長い布地を縫合して長方形にした布地に刺繍糸で装飾を施すまでは同様である。サイズは⑦，①，⑥の順で大きい。⑦はおよそ150×280センチの長方形の辺が短い方の１辺のみ，もしくは型に約30センチほどモティーフを配置させる。①は150×250 センチの布地全面にカシュタのモティーフをデザインする。⑥は約70×100センチの布地の３辺にムスリムの礼拝の方角（キブラ，qibla/a）を示す凹型の部分にモティーフを配置し，カシュタで装飾をする。３品の相違は布地の寸法及びカシュタが施されるデザイン構成のみである。

換言すれば，カシュタを繍うという行為だけが単なる布地と糸だったモノを壁掛け，礼拝用敷物，婚礼用シーツといった様々な品物に変えるのである。品物自体のサイズが大きい上に，カシュタを施す面積の広さを勘案すると持参財を準備する際のカシュタ技能の重要性が理解できる。

スーハレヴァによれば，19世紀中頃まではこの多数のカシュタ装飾品を準備するのに，親族中の女性たちに声をかけ，大人数で持参財の準備をした。そしてこのカシュタ制作の呼びかけに応じないと，親族同士の関係が悪化するとまで言われていたという（Sukhareva 1937：132）。

スーハレヴァやジュマエフの見解に従えば，19世紀における持参財のカシュタ制作の価値観には邪視や悪霊といった存在から花嫁の身を守る呪術的な世界観が背景にあった。さらに手のかかる大判のカシュタ制作を支えた倫理規範とは，親族同士の関係を強化する目的があった。だがこの19世紀的な価値観や倫理規範は20世紀初頭には変化していった。その主な要因は持参財の刺繍装飾法に代替手段が普及し始めたことである。ソ連期にミシン刺繍製品[9]や廉価なプリント布地が広く普及し始め，かつてほど持参財準備におけるカシュタ装飾品の重要性はなくなった（Morozova 1960：10）。またソ連期以前は特権階級の装飾であった金糸刺繍（ザルドゥズ，zardo‘z/u）[10]の工場が設立され，大衆用制作が開始された（Goncharova 1986：9；Sidorenko, Arykov and Radjabov 1981：80）。ソ連期にもたらされた新たな布や刺繍法の普及が持参財装飾に選択の余地を与え，制作状況を一変させたのである。次節では，筆者が集中的に調査[11]したブハラ州ショーフィルコーン地区の具体的事例から，持参財における刺繍装飾の変遷を探っていきたい。

## 3　ブハラ州ショーフィルコーン地区におけるカシュタ制作

### 3.1　調査地とカシュタ制作

ブハラ州ショーフィルコーン（Shofirkon）地区はブハラ市から走行距離にして北上約65キロの地点に位置する。2005年度の統計では，人口約13万8,100人の内，約９割（12万5,100人）が村落部に居住する（Shofirkon Statistika 2005：1）。生業は綿花，穀物，

野菜果物を中心とする農業，養蚕，牛，羊，山羊等の家畜飼育である。その他の職業として，男性では学校教師，国営機関の職員，工場労働者，現金収入に結びつきやすい製鉄業，タクシー業，建設業に従事する者が多い。女性では学校教師，幼稚園教員，商店の販売業，服の仕立て，金糸刺繍，カシュタ，ミシン刺繍の各刺繍業への従事者がいる。地区ではソ連崩壊に伴う国営工場の倒産が相次ぎ，男女共に国営工場で働ける人数は限られていた。2002年度の統計によると，2001年集計の地区住民の平均的所得は１万2,500スムであり，当時の闇レート換算では約8.3米ドル（約1,000円）[12] に相当する（Shofirkon Statistika 2002：9）。筆者は地区中心地から南西方向に車で10～20分程度の村落部を中心に[13] 刺繍業を営む女性達にインタビューを行った。

筆者が調査を開始した2002年，ショーフィルコーン地区村落部ではほとんどの女性がカシュタ技能を有する[14] が，制作に携わらない女性も多かった。その理由の一端はショーフィルコーン地区のカシュタの商品化にあった。1991年の独立以降，増加する外国人ユーザーを対象に商品用カシュタが新たに開発されたのである（今堀 2006a；2006b）。同地区の商品用カシュタは外部の援助団体主導で開発されたのではなく，地元の美術教師がアメリカ人から注文を取る過程で改良を重ね商品化された。ゆえに同地区の商品用カシュタは値段や質において村落部の女性達の購入品ではない。商品用カシュタの制作者たちによって専ら外国人向けに制作されたカシュタは，外国人の顧客（クリエント，klient/r）の嗜好に合うよう商品化され，さながら19世紀にブハラ州で制作されたデザイン構成・モティーフそのままに制作される（今堀 2006b：70）。

カシュタ制作者には事業家でもあり，カシュタ制作工程の全般を統括するカシュタチ（kashtachi/u，刺繍屋）と，繍いを請け負うカシュタ繍い子（カシュタ・ティクヴチ，kashta tikuvchi/u）がいる。カシュタチはカシュタの専門家として展示販売会に参加して作品を販売する。1990年代以降，同地区ではカシュタ制作者達を始め下絵描き，カシュタ用織布工などカシュタ関連業で現金収入を得る者が増加した。カシュタ関連業を除き，カシュタを繍う作業は女性の仕事と考えられている。

上述のように，ショーフィルコーン地区では商品用カシュタ制作は独立以降に登場した新しい現象として，現金獲得の手段を女性たちにもたらした。この現象を可能にした背景には商品化以前に地区女性たちがカシュタ技能を継承してきた経緯がある。従来ショーフィルコーン地区の女性たちはカシュタを持参財装飾の技能として，自ら制作し，自ら消費していた。次節でショーフィルコーン地区村落部の持参財装飾の変化を概観する。

## 3.2 持参財における刺繍装飾の変化

【表２】は主にショーフィルコーン地区村落部女性達からの聞取り[15]に基づき，地区で一般的に見られる３種類の刺繍法（カシュタ，金糸刺繍，ミシン刺繍）の内，どの品目にどの装飾法が好まれたかを結婚年代別に示したものである（【表２】参照）。

【表２】 結婚年と持参財における刺繍装飾品の関係

| 結婚年代 | カシュタ | 金糸刺繍 | ミシン刺繍 | 刺繍無し |
|---|---|---|---|---|
| 1930年以前 | ①, ②, ⑥, ⑦（注１） | なし | なし | ― |
| 1931～1940 | ①, ②, ⑥, ⑦（注１） | なし | なし | ― |
| 1940～1950（注１） | ①, ②, ⑥, ⑦, ⑧, ⑪, ⑬, ⑭, ⑮, ⑯ | なし | なし | ①(パッチワーク), ③, ④ |
| 1951～1960 | ①, ②, ⑥, ⑦, ⑧(20～30枚), ⑪, ⑮(20～40枚) | なし（注３） | なし（注３） | ③, ④, ⑲, ㉗ |
| 1961～1965 | ①, ②, ⑥, ⑦, ⑧(20～30枚), ⑪, ⑮, ⑰(少数), ⑱(20～40枚) | ⑪(少数) | ①, ⑥, ⑦, ⑮(少数) | ③, ④, ⑲, ㉖, ㉗ |
| 1966～1970 | ①(少数), ②, ⑥, ⑦, ⑧(10枚～30枚), ⑮, ⑰(10枚～30枚), ⑱(20枚～40枚), ⑳(５枚～15枚), ㉕ | ⑪ | ①, ⑥, ⑦, ⑮ | ③, ④, ⑲, ㉑, ㉖, ㉗ |
| 1971～1975 | ①(少数), ②, ③, ⑤, ⑥(少数), ⑦(少数), ⑧(10枚～100枚), ⑮, ⑰(10枚～30枚), ⑱(20枚～40枚), ⑳(５枚～15枚), ㉔, ㉕ | ⑪ | ①, ②, ⑤, ⑥, ⑦, ⑮, ㉒ | ①, ②, ③, ④, ⑱(20枚～40枚), ⑲, ㉑, ㉖, ㉗ |
| 1976～1980 | ①(少数), ②, ⑤, ⑥(少数), ⑦(少数), ⑧(10枚), ⑮, ⑰(５枚～30枚), ⑱(20枚～60枚), ⑳(５枚～15枚), ㉔, ㉕ | ⑪ | ①, ②, ④, ⑥, ⑦, ⑧, ⑮, ㉑, ㉒ | ①, ②, ③, ④, ⑱(20枚～40枚), ⑲, ㉑, ㉖, ㉗ |
| 1981～1985 | ①(少数), ⑥(少数), ⑧(10枚), ⑰(５枚～30枚), ⑱(20枚～60枚), ⑳(５枚～15枚) | ⑪, ㉓(少数), ㉒（少数） | ①, ②, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧（～50枚), ⑮, ㉑, ㉒ | ①, ②, ④, ⑮, ⑱(20枚～40枚), ⑲, ㉑, ㉖, ㉗ |
| 1986～1990 | ⑧(１～10枚), ⑰(５枚～30枚), ⑱(20枚～60枚), ⑳(１枚～15枚)(少数) | ⑪, ㉓(少数), ㉒（少数） | ①, ②, ④, ⑥, ⑦, ⑧(～50枚), ⑮, ㉑, ㉒, ㉓ | ①, ②, ④, ⑮, ⑱(20枚～40枚), ⑲, ㉑, ㉖, ㉗ |
| 1991～1995 | ⑧(１枚), ⑰(２～３枚), ⑳(２～３枚) | ⑪, ㉓(少数), ㉒（少数） | ①, ②, ④, ⑥, ⑦, ⑧, ㉑, ㉒, ㉓, ㉖, ㉗ | ①, ②, ④, ⑫, ⑮, ⑱, ⑲, ⑳, ㉑, ㉒, ㉓, ㉖, ㉗ |
| 1996～2000 | ⑧(１枚), ⑰(２～３枚：少数), ⑳(２～３枚：少数) | ④, ⑧, ⑩, ⑪, ⑲, ㉒, ㉓ | ①, ②, ④, ⑥, ⑦, ⑧, ㉑, ㉒, ㉓, ㉖, ㉗ | ①, ②, ④, ⑫, ⑮, ⑱, ⑲, ⑳, ㉑, ㉒, ㉓, ㉖, ㉗ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 2001～2006 | ②(少数), ⑥(少数), ⑧(1枚), ⑰(2～3枚：少数), ⑳(2～3枚：少数) | ②, ④, ⑥, ⑧, ⑨, ⑩, ⑪, ⑱, ⑲, ㉑, ㉒, ㉓, ㉖, ㉗ | ②, ④, ⑥, ⑦, ⑧, ⑫, ⑬, ⑭, ⑯, ㉑, ㉒, ㉓, ㉖, ㉗ | ①, ②, ④, ⑫, ⑮, ⑱, ⑲, ⑳, ㉑, ㉒, ㉓, ㉖, ㉗ |

表はショーフィルコーン地区村落部の女性を対象に聞き取りを基に筆者作成（およその数を示す）
注１　当時期は十分な情報数が集まらず，確実に確認できた物のみ記載
注２　―は情報なしを表す
注３　地区中心地のエリート女性はすでに輸入品を使用していた
注４　（少数）は大多数の使用ではなく，特定の者のみ使用を示す
注５　番号は以下の品物を表す

| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | 壁掛け（兼布団台カバー） | ⑭ | 裾飾りリボン |
| ② | クッション（枕）カバー | ⑮ | 女性用スカーフ |
| ③ | 炬燵カバー | ⑯ | 襟飾り |
| ④ | 鏡入れ | ⑰ | 小壁掛（70cm 四方以下） |
| ⑤ | 横長梁飾り | ⑱ | ハンカチ |
| ⑥ | 礼拝用敷物 | ⑲ | 茶葉入れ |
| ⑦ | 婚礼用シーツ | ⑳ | タオル（手拭い） |
| ⑧ | 腰巻き | ㉑ | ティーポットカバー |
| ⑨ | 礼装用長衣 | ㉒ | 女性用ズボン |
| ⑩ | 礼装靴（男女） | ㉓ | 女性用長衣 |
| ⑪ | 縁なし帽（女） | ㉔ | ベットサイド装飾 |
| ⑫ | ベスト | ㉕ | カーテン |
| ⑬ | 袖飾り | ㉖ | うちわ |
| | | ㉗ | 食布 |

※品目は筆者の聞き取りを基にショーフィルコーン地区で一般に用いられる持参財から刺繍装飾が施されるものを選択。

### 3.2.1　カシュタの変遷

【表２】から1950年代以前，ショーフィルコーン地区村落部で持参財装飾はカシュタのみであったことが分かる。同時期までに結婚した女性達が一様に挙げるのは，①壁掛け（大判），⑥礼拝用敷物，⑦婚礼用シーツである。第２次世界大戦中から戦後にかけて，地区の女性達の多くは生活が苦しく，カシュタを制作する暇がなかった。もっともそれ以前，女性なら誰でも結婚前にカシュタで持参財を準備すべきとする倫理規範があった。幼少から時間をかけてカシュタを準備した80代の女性（年齢は2006年当時以下同様）は，上述の３品に加え婚礼用衣装の部分飾り⑬，⑭裾飾りリボン，⑯襟飾り，⑪縁なし帽もカシュタで装飾を施した。

1950年代から60年代にかけて，⑧腰巻き，⑮女性用スカーフをカシュタで装飾することが制作の中心を占めた。これはボリエフが指摘した持参財お披露目儀礼に集まった男性客に腰巻きを，女性客にはスカーフを贈る習慣による。この贈物は布地一面にカシュタを繍うのではなく，カシュタでワンポイントの装飾を施す。１枚当たりの労力はさほどではないが，20～30枚以上量産する必要があった。当時，小さなカシュタの装飾品を多数制作し，持参財お披露目儀礼で来客（メフモン，mehmon/u）１人１人に配ったと60代の女性は語った。

これは持参財お披露目儀礼で花嫁が来客に挨拶をしてもてなし，カシュタの装飾品を

贈る習慣があったことを示している。贈物を含む慶事のもてなしは大きな経済的負担でもあるが，客好き（メフモン・ドゥスト，mehmon do‘st/u）という表現で，来客をもてなし，新たな人間関係を積極的に構築すべきという倫理規範があった。それ故，来客に贈る品物に特に美しいカシュタ品を用意した。

1960年代後半～70年代にかけて，大判の①を制作する者は徐々に減り，かつてなかった⑰小壁掛けや⑳タオルが多数制作され始めた。これは①大判壁掛けの単なる小型化ではなく，デザイン，糸，布地の種類も異なる新しいロシア風カシュタであった（今堀 2006b：65を参照）。女性用の贈物はスカーフよりもサイズの小さい⑱ハンカチが中心となった。この傾向は1980年代に顕著となり，①大判壁掛けにカシュタを用いる者は減った。代わって贈物用のワンポイント・カシュタ及びロシア風カシュタが持参財装飾の主流となった。この時期，ロシア風カシュタに簡単なメッセージを繍い込むことが流行った。最も好まれたメッセージ「ようこそお客様（xush kelibsiz, aziz mehmonlar/u）」から当時のカシュタ制作の目的を伺い知ることができる。たとえデザインやステッチは変化しても，来客をもてなすという倫理規範には変化がなかった。

1990年代初頭，村ではロシア風カシュタの制作は下火となる。来客に配ったハンカチを始め，持参財には既製品が多数を占めてきた。カシュタを趣味とする女性たちの中には，⑰ロシア風カシュタの小壁掛けや⑳タオルを２，３枚制作する者，婚後に夫や舅へ贈る品としてカシュタで⑧腰巻きを制作する者もいた。それでも1990年代にカシュタの制作数は急激に減った。その要因として，1990年代に結婚した女性たちは流行遅れ，経済的・時間的余裕の減少という理由を挙げ，娘を結婚させた母親たちはウズベキスタン政府への配慮，安価な既製品の普及等様々な理由を挙げた。さらに，1998年の過美な結婚儀礼を排する大統領令[16]の影響で村落部にも教育機関を通じて政府指導が通達された。村のある女性教員は筆者に村の結婚儀礼を説明する際，持参財お披露目儀礼は現在も重要な位置を占めるが「最近は過度なもてなしは必要ない」と付け加えた。持参財お披露目儀礼でカシュタの装飾品を贈る習慣は徐々に下火になった。

筆者が調査に入った2002年，持参財お披露目儀礼で来客にカシュタ装飾品を贈る習慣は既に全く見られなかった。加えて商品用カシュタ制作者の一部のみ持参財にカシュタ装飾品を用意していた。大半の地区の若い女性達は持参財の装飾品に市場で購入した金糸刺繍，ミシン刺繍品を準備する。例として，2006年に結婚した（商品用カシュタ制作に携わらない）村落部女性の持参財一例を【付録】で示した。そこにはカシュタで装飾された持参財はない。花嫁本人が手作りした装飾品もなく，ミシン刺繍や金糸刺繍などの既製品が増えていた。もっとも市場で購入したのは花嫁本人であり，彼女が結婚前に働いた給与で自ら購入した物もある。結婚後，花嫁の手作りの持参財がなくて問題にされたことは一度もないと言う。

### 3.2.2　金糸刺繍，ミシン刺繍の変遷

【表２】から，ショーフィルコーン地区村落部で金糸刺繍装飾品は1960年代後半以降，比較的新しい時期に⑪女性用縁なし帽のみ使われ始めたといえる。これは専らブハラ市内の工場で制作された既製品購入に頼り，自ら制作できる女性は地区にいなかった。1970年代中葉に結婚した50代の女性によると，彼女や友人達の結婚式の一般的な婚礼衣装は既製品の金糸刺繍の縁なし帽に，ハーン・アトラス（xon atlas/u：多彩色の絣織の布地）であったという。同地区でも1980年代に入ると個人的に金糸刺繍技能を習得した女性も少数ながら現れる。もっとも同地区の村落部で当時まだ金糸刺繍で持参財を準備する女性は少ない上，地区内に金糸刺繍を制作する工房もなかった。

1990年代後半，本格的な市場経済化の導入や民族工芸振興政策[17]により金糸刺繍技能を習得した女性達が個人で工房を開きやすくなり，様々な金糸刺繍の装飾品が市場に溢れた。この影響で村落部住民も金糸刺繍の装飾品を購入して持参財に用い始めた。特に2000年以降，その種類は飛躍的に増加し「頭からつま先まで（sarpo/u）」と称される４点セット，⑪縁なし帽，㉓女性用長衣，㉒女性用ズボン，⑩礼装用靴が定番として購入された。このセットは通常，受妻者側が婚資として与妻者側に渡す品とされる。受妻者側から受けた品を女性が間接持参財として婚家に持ち込む。また1980年代頃まで美しい布地やパッチワークで制作された④鏡入れ，⑲茶葉入れ，㉗食布などの小物も金糸刺繍の装飾品が用いられ始めた。

ミシン刺繍製品も金糸刺繍同様，1960年代に本格的に普及し始めた。それ以前もミシン刺繍製品を使用する者はいたが，首都タシュケントやブハラ市内に出向き購入できる者達に限られていた。60年代以降になると，ショーフィルコーン地区で販売されて広く普及した。金糸刺繍と異なり汎用性の高いミシン刺繍製品は手入れの必要な日用品である①壁掛け，⑥礼拝用敷物，⑦婚礼用シーツ等，⑮女性用スカーフ等に用いられた。1960年代後半から70年代，大判で刺繍箇所が多い品はほぼミシン刺繍で用意され，カシュタはサイズの小さな品のみになった。80年代初頭，同地区に刺繍用ミシンが導入され注文生産も開始した。地区の人々は近隣都市で制作したものを地元の市場で購入するのみならず，必要な品を地元で好みのデザインに合わせて購入できるようになった。独立以降も大判の品物や礼服を中心に安価で手軽なミシン刺繍が用いられるが，潤沢な資金があれば金糸刺繍が選好される傾向にある。

第３節では，ショーフィルコーン地区村落部で女性たちが刺繍で装飾した持参財を準備する重要性とその変遷が明らかになった。次の第４節では，カシュタ制作者への聞取り及びアンケート結果から，カシュタの商品化に伴うカシュタの文化的意味合い，価値観，倫理規範に対する見直しと再解釈の過程を探る。

## 4 カシュタ制作者達の持参財装飾

### 4.1 カシュタチの持参財

ショーフィルコーン地区の商品用カシュタ制作を統括し，事業を運営するカシュタチの仕事は，商品用カシュタのデザイン選択，布地や糸など原材料の準備，カシュタ繍い子の手配，配色の指示，繍いの質指導など多岐にわたる。カシュタを繍う技能よりもむしろカシュタの品質を判断する総合的能力が彼女たちに求められる。事業家兼経営者でもある彼女たちの大半は，年配・既婚女性，高学歴（大卒）という特徴があった（今堀2006a：125）。2002年時点で既に名の知られたカシュタチ10名，及び新たに事業を始めたカシュタチの中で2006年の追加調査で聞取りができた５名[18]を合わせた15名中，未婚の20代女性１名[19]を除く14名中11名までが1980年代に結婚している。残りの３名は1970年代後半が１名，1990年代前半が２名である。

商品用カシュタ事業を創設したカシュタチのズライホー[20]は1976年の結婚当時，姉や母と協力して持参財にロシア風の小壁掛けやタオルを多数制作した。彼女の母や彼女と同学年の女性達が記憶するズライホーの娘時代は，「頭が良く優秀で（勉強で忙しく：筆者註）ほとんどカシュタをしなかった」という。村の女性の大半が一貫制教育機関卒業と同時に就職した時期にズライホーは首都タシュケントの芸術大学に進学し，高等教育を受けた。ズライホーの友人，親族内には結婚当時の彼女より優れたカシュタ技能をもつ女性は多かった。

タシュケントの国立大学で言語学を修め，地元の一貫制学校で国語の教師を勤めるグルオイは，2001年からカシュタ制作業を兼業し始めた。現在，刺繍糸の染色も自ら担当する彼女は，1984年の結婚当時染色の知識はなく祖母に絹糸の染色を頼んだ。その糸で持参財用のハンカチ40枚と礼拝用敷物，ロシア風小壁掛け２枚，腰巻きの内６枚をカシュタで繍った。残り15枚の腰巻き，女性用ズボン，女性用スカーフ，大判壁掛け，婚礼用シーツ，クッションカバー，横長梁飾り，鏡入れ，ティーポットカバーは全てミシン刺繍の装飾品を用いた。グルオイによれば，彼女が結婚した80年代前半「学のある女性はほとんどカシュタをしなかったものよ」と語った。

1972年生まれとカシュタチの中でも一際若いラーノは，ブハラ国立師範大学で芸術学を専攻し，卒業制作にカシュタを選択したほど手工芸一般を得意とした。1998年にカシュタチを開始して最後に聞取りが実施された2006年でも，村の美術教師とカシュタチを兼任していた。行政地区にカシュタ制作会社の登録を行い，様々な支援団体から助成金を受けて活動の幅を広げてきたラーノだが，1993年の結婚当時，自らの持参財にロシア風カシュタで小壁掛けとタオルを数枚繍っただけであった。それでも彼女は懐かしそうにロシア風デザインのカシュタを見つめながら「もしこのロシア風のカシュタを買ってくれる顧客がいれば，今でもこれを作れるわよ」と話した。

筆者が聞取りをしたカシュタチの中で，持参財にカシュタを全く用いなかった者はいない。持参財お披露目儀礼で来客に贈るハンカチや腰巻き，そしてロシア風小壁掛け数枚は必ずカシュタで制作した。だが，彼女達は親戚や友人が当時準備した持参財で目にしたカシュタ装飾品の数と比較して，自ら制作したカシュタ装飾品の数を少ないと感じていた。1970〜90年代，高学歴女性にとってボリエフが重視した「価値ある嫁」の条件として持参財のカシュタ装飾品はさほど重視されてなかった様子が窺える。

## 4.2 カシュタ繍い子の持参財

カシュタ制作業を営むカシュタチの元には，カシュタを実際に繍う女性達 —— カシュタ繍い子 —— がいる。彼女たちの大半はカシュタをカシュタチや知り合いから学び，多くの注文品を制作する過程で技能を習熟させていく。2002年から2003年にかけてカシュタ繍い子142名を対象に実施したアンケートの結果から，カシュタ繍い子には未婚の若年女性，高学歴者が少ない（学歴不問）という特徴が指摘できた。また，カシュタチがしばしば夫よりも高い収入を得ているのに対し，繍い子は小遣い稼ぎ程度の賃金がほとんどであった（今堀 2006a：128）。

同地区では女性が25才頃までの結婚が理想とされる状況を鑑みると，遠からず結婚用に持参財を準備すると予測された。【表３－１】から【表３－3.2】は，持参財におけるカシュタ，金糸刺繍，ミシン刺繍という３種類の刺繍装飾品の有無について調べるアンケートの集計結果を表にした。142名の回答者の内，本設問に回答したのは113名。【表３－１】，【表３－２】，【表３－３】以外は複数回答可である。

【表３－１】　カシュタを個人的に使うか

| | |
|---|---|
| はい | 83 |
| いいえ | 27（7） |
| 無回答 | 3 |
| 総計 | 113 |

【表３－1.1】　どの場面で用いるか

| | |
|---|---|
| 結婚式 | 68 |
| その他の祝事 | 17 |
| 祭日 | 24 |
| その他（室内装飾） | 5 |
| 無回答 | 3 |
| 延べ数 | 117 |

【表３－1.2】　カシュタを用いる理由

| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | 62 | ① | 民族伝統（習慣）。 |
| ② | 5 | ② | 他人の祝事での使用が素晴らしかったから。 |
| ③ | 29 | ③ | 自分の手で繍った物を愛する人に贈りたい。 |
| ④ | 6 | ④ | 自らの技能を多くの人に知ってもらいたい。 |
| ⑤ | 6 | ⑤ | 婚家の両親に素晴らしいと思って欲しい。 |
| ⑥ | 14 | ⑥ | 子孫に遺産を残すため。 |
| ⑦ | 13 | ⑦ | この時に刺繍を用いると幸せになれる。 |
| ⑧ | 8 | ⑧ | 刺繍をすることで自らが美しくみえる。 |
| ⑨ | 女の義務3，贈り物1 | ⑨ | その他 |
| 無 | 21 | | |

【表３－２】 金糸刺繍を個人的に使うか

| | |
|---|---|
| はい | 106 |
| いいえ | 3 |
| 無回答 | 4 |
| 総計 | 113 |

【表３－３】 ミシン刺繍を個人的に使うか

| | |
|---|---|
| はい | 95 |
| いいえ | 6（1） |
| 無回答 | 12 |
| 総計 | 113 |

【表３－2.1】 どの場面で用いるか

| | |
|---|---|
| 結婚式 | 78 |
| その他の祝事 | 22 |
| 祭日 | 36 |
| その他（室内装飾） | 1 |
| 無回答 | 4 |
| 延べ数 | 141 |

【表３－3.1】 どの場面で用いるか

| | |
|---|---|
| 結婚式 | 76 |
| その他の祝事 | 29 |
| 祭日 | 16 |
| その他（室内装飾） | 2 |
| 無回答 | 12 |
| 延べ数 | 135 |

【表３－2.2】 金糸刺繍を用いる理由

| | |
|---|---|
| ① | 60 |
| ② | 14 |
| ③ | 15 |
| ④ | 5 |
| ⑤ | 6 |
| ⑥ | 4 |
| ⑦ | 10 |
| ⑧ | 8 |
| 無 | 10 |

【表３－3.2】 ミシン刺繍を用いる理由

| | |
|---|---|
| ① | 61 |
| ② | 11 |
| ③ | 14 |
| ④ | 4 |
| ⑤ | 4 |
| ⑥ | 11 |
| ⑦ | 9 |
| ⑧ | 5 |
| ⑨ | 自分の仕事1，時間の短縮1 |
| 無 | 10 |

※（　）の数は自分は使わなかったが，一般的に使われると回答した者

【表３－１】，【表３－２】，【表３－３】のカシュタ，金糸刺繍，ミシン刺繍を個人的に使うか，という設問に対して「はい」の回答数が最も多かったのは金糸刺繍の106名。そして最も多く「いいえ」と回答したのはカシュタの27名である。カシュタ繍い子でありながら，カシュタを個人的に用いない理由[21]に「カシュタは賃金のため」と回答する者がいた。もっとも，地区の未婚女性の大半は今や持参財にカシュタ装飾品を準備しない現状を鑑みると，83名がカシュタを用いると回答しているのは賃労働で技能を習得したことが契機であると推測できる。一方，金糸刺繍については技能をもつ者，もたない者[22]に関係なく，個人的に使わないと回答したのは３名のみ，カシュタ繍い子の大半が金糸刺繍を用いることが示された。ミシン刺繍について大半（95名）の回答者は使うと答えた。

【表３－1.1】から【表３－3.1】はどの場面で各刺繍装飾品が用いられるかについて調べたものである。３種類の刺繍装飾品の内，カシュタと金糸刺繍は１位 結婚式，２位 祭日[23]，３位 その他の祝事となった。ミシン刺繍は２位と３位が入れ替わる程度で

使用される場面はほぼ同じと見て取れる。総じて結婚式の持参財として３種類の刺繍品は用意され，持参財お披露目儀礼を始め祭日や祝事等の場での室内装飾品や着用品として認識されていることが分かる。

次に理由を尋ねた【表３－1.2】から【表３－3.2】では，回答数最多の（1）我々の民族的伝統[24]（milliy an‘anamiz/u，ミッリー・アナナミズ），もしくは我々の習慣（urf-odatimiz/u，ウルフ・アダットミズ）が３種類の刺繍装飾品それぞれ同数で見られた。この結果から金糸刺繍，ミシン刺繍，カシュタも等しくカシュタ繍い子達に「民族的伝統」と認識されている。また，持参財お披露目儀礼での贈物としての刺繍品の重要性を示唆する回答例，「(4）自分の技能を広く知ってもらいたい」，「(5）婚家の両親に素晴らしいと思って欲しい」，を選択する者は多くなかった。むしろ【表３－1.2】では，情緒的結びつきが強調される選択肢，「(3）自らの手で繍ったものを愛する人に贈りたい」を選択するカシュタ繍い子が多かった。アンケート結果からカシュタ繍い子は，地区女性より持参財にカシュタ装飾を準備する率が高いといえよう。ただし，準備する理由はかつてのような来客への贈物ではないようだ。

一例として，2006年２月に筆者が聞取りしたカシュタ繍い子オミーダの事例を挙げよう。1981年生まれのオミーダは，1996年から当時開校していたカレッジ（日本の高等学校に相当）の工芸科でズライホーにカシュタ技能を専門的に学んだ。カレッジ卒業後，ズライホーから注文品を受取り，家でカシュタを施してズライホーに納品する仕事を始めた。彼女は2001年の結婚後もカシュタの仕事を継続した数少ない女性である。彼女は以下のように述べる。

> 結婚する条件としてカシュタの仕事を続けさせてくれることを出したわ・・・私はカシュタの仕事が取れない時は泣きながら家に帰るの。カシュタを繍っていないといられないのよ。（賃金の良い大きな：筆者註）注文品がなければ（賃金の低い：筆者註）小さな注文品でも受けるわ。

彼女が１日にカシュタ制作に従事する時間は平均８～９時間。注文の多い時は姉妹や家族に家事を預けて１日中注文品に向かう時もある。その背景には家事を分担する女性親族や家畜飼育・家庭菜園などの労働を担当する男性親族の存在が欠かせない。

それほどカシュタに親しむ彼女も，自らの結婚持参財にカシュタの男性用腰巻きを１枚作り舅に贈っただけで，他は金糸刺繍の装飾品を準備したという。理由を尋ねると「金糸刺繍はブハラの民族文化だし，持参財に相応しいと思ったから」と述べた。彼女は金糸刺繍や簡単な仕立てもでき，最近は製菓・調理免許，家庭介護師の資格取得も考えている。それでも彼女にとってカシュタは特別な仕事だという。「(家で：筆者註）カシュタをしながら色々できるのがいい」と述べる。教師であった彼女の姑は「カシュタの仕事は沢山の利点がある。教師のように外で働く仕事は家事・育児が完全に人任せになる。カシュタは家に居ながらにして家事もしつつ空き時間を利用して収入も得られる。女性

が夫とは別の収入源をもつのは大切なことなのよ」と語った。

## 5 結び

本論ではウズベキスタン，ブハラ州ショーフィルコーン地区における持参財の刺繍装飾品を取り上げ，カシュタの文化的意味合いとポスト社会主義期の商品化に伴う変化を明らかにしてきた。またカシュタ制作者達が外国人向け商品を制作する過程で，カシュタ制作を支えてきた従来の価値観，倫理規範に検討を加え，再解釈を生み出す様子を論じてきた。以下で，今までの議論からカシュタというモノに対する新たな文化的意味合いが生じた経緯をまとめ，従来の価値観及び倫理規範に対する再解釈を整理して若干の考察を加えよう。

先行研究によればウズベキスタンの持参財の文化的意味合いとは，花婿側の家族，親族，近隣に住む女性といった，婚入後花嫁が日常的に接するはずの女性たちが，花嫁の人柄を判断するため儀礼で花嫁の持参財，特に花嫁が手作りしたカシュタの装飾品を目にし，その内容・質から「価値ある嫁」か否かを決める重要な文化的指標とした点にある。19世紀にはこのカシュタの文化的意味合いは，邪視や悪霊からの守護といった呪術的な世界観とカシュタの共同制作を通じた親族同士の連帯維持という強い倫理規範で維持されていた。

ブハラ州ショーフィルコーン地区の事例では，1990年代以前までカシュタは確かに女性が持参財を装飾する技能という文化的意味合いを帯びていた。持参財お披露目儀礼で訪れる客にカシュタ装飾品を贈る習慣を継続させていたのは，カシュタが女性なら誰でも習得すべき技能であり，来客をもてなし，新たな人間関係を広げるための贈与品とすべきという倫理規範があった。ここから地区の女性たちは来客へのカシュタ装飾品の贈与が「価値ある嫁」という評判に結びつき，結婚後の生活を安定させるという価値観をある程度共有していたと考えられる。

興味深いのは1970～80年代，地区でも高学歴女性の一部は，この価値観に対して再解釈を試みていた点である。それが「学のある女性はほとんどカシュタをしなかった」という見解である。1970～80年代，ソ連を構成する共和国であったウズベキスタンでは社会主義体制が安定し，村落部生まれの女性でも能力次第で大学進学・知的職業に就業できる社会情勢があった。その社会情勢を背景にカシュタ技能の有無を「価値ある嫁」の要件としてきた従来の価値観が検討され，高学歴で収入を得る女性たちを高く評価しようとする再解釈が試みられたのである。

1990年代以降ポスト社会主義時代になると，地区のカシュタ制作を巡る状況は一変する。欧米を中心とする外国人が観光地ブハラ市を訪れカシュタを買い付け始めると，カシュタ制作者に多額の外貨がもたらされた。ソ連崩壊による村落部の経済混乱，2004

年までの統制為替制度と闇レートの存在といった社会情勢を背景に，為替差益で多額の現金を手にしたカシュタ制作者は，カシュタを商品向けに大量制作して経済活動の対象に作り替えた。ゆえに，地区では商品用カシュタ制作者と制作に全く携わらない女性という二分化が生じた。

1970年代頃から村落部女性の就業という現金収入の機会増加に加え，ポスト社会主義時代の過美な儀礼を排する大統領令，市場に溢れる廉価な布製品の普及，金糸刺繍といったブハラの宮廷文化を代表する刺繍技能への憧れから，カシュタ制作業に携わらない女性たちは，持参財お披露目儀礼においてカシュタ装飾品で来客をもてなすことはなくなった。それに伴い，女性であれば誰でもカシュタをすべきとする倫理規範，カシュタ装飾品の贈与が「価値ある嫁」とされる価値観も全体的に見直されていった。

注目すべきは，カシュタが女性の技能という従来の文化的意味づけは商品制作が組織される過程でこそ重視された点である。中谷が論じたバリ島の紋織のように，カシュタも「女の仕事」（中谷 2003）というジェンダーにまつわる文化的意味づけは維持され，女性が特権的に得られる収入源[25]を保証した。その結果，女性の起業を促すと同時に，低賃金で働く女性労働者も生み出した。

高学歴女性が多数を占めるカシュタチにとって自らの結婚持参財として重視しなかったカシュタで起業するという皮肉な状況が生じているが，事業家である彼女たちにとって来客をもてなすカシュタから，顧客の嗜好に見合うカシュタ制作へと市場原理に則った文脈の読み替えがなされたといえる。観光客からのまなざし（アーリ 1995）に応じた土産物としてカシュタが制作される以上，将来的に来客をもてなすという文化的意味合いは文化資源として読み替えられ，顧客をもてなすカシュタという商品価値として再解釈が生じる可能性もあろう。

他方のカシュタ繍い子はほとんどが低賃金であるが，ソ連崩壊後に生じた国営企業の倒産といった社会不安を背景に小遣い稼ぎ程度の賃金でも就業する女性は多い。同時に彼女たちはカシュタ装飾品がかつて結婚持参財だった習慣を知っており，賃労働を契機にカシュタ技能を自らの持参財に生かす者もいる。だが，その理由として婚家の家族及び親族などが判断する「価値ある嫁」になるという価値観がさほど意識されてなかったことはアンケート結果からも明らかである。カシュタ技能に誇りを持つオミーダはむしろ自らの持参財をカシュタで装飾することには無頓着であった。その彼女が語るカシュタという仕事の特別さとは一体何だろうか。

国家予算の削減によって，社会主義時代にあった村落部の集団農場や農業従事者の生活安定のための優遇処置が十分に行き届かないポスト社会主義時代にあっては，女性が家を離れず仕事しうるカシュタ繍い子の仕事としての特徴こそ重視されたのである。すなわち，村落部のウズベク女性の日常で大きな比重を占める家事・育児といった仕事を人任せにせざるを得ない教師や工場労働者といった家外の仕事に較べ，家内で注文品を

仕上げられるカシュタの特別さが注目された。オミーダの姑がオミーダを「価値ある嫁」とみなした経緯には，単にカシュタ能力があるからではなく，嫁が結婚後も家で家事・育児と両立してカシュタの仕事を続け，自らの技能を資本に夫と別収入を確保しうる特別さこそが「価値ある嫁」の証とする再解釈に繋がったと考えられる。

社会主義から市場経済化への転換には，集団主義への固執や生業経済化といった生活戦略が多くの研究で指摘されているが（Akiner 1997；Shreeves 2002；Werner 2004など），本論の事例は，カシュタが女の仕事ゆえに女性の起業家を生み出す一方で，そこに労働者として関わる女性も家に居ながらにして世帯経済の中で新しい役割を果たしうる特別な仕事としてのカシュタの側面を論じてきた。もっともその特別な仕事を支える顧客は，欧米を中心とする外国人であり，中央アジアの治安情勢及び各国の消費動向次第では，急激な増減を繰り返す不安定さは残るのである。

## 謝　辞

本論は，平成13年度文部科学省アジア諸国等派遣留学生制度の奨学金，平成17年度国際交流知的交流フェローシップの助成金を受領して行った調査に基づいている。調査地では，村落部での生活の場を提供してくださったホームステイ先のラヒモフ（Rahimov）一家には公私にわたりお世話になった。ショーフィルコーン地区のカシュタ制作者の皆様を始め，本当に多数の方々にご協力頂いた。タシュケントでは，アシロフ（A. Ashirov）氏からウズベク語及び旧ソ連圏の民族学の知識を丁寧にご指導頂いた。執筆に当たっては東京外国語大学の大塚和夫先生，東京都立大学の渡邊欣雄先生，伊藤眞先生，鄭大均先生，高桑史子先生をはじめ論ゼミ履修の院生諸氏から貴重なコメントを頂いた。また，高倉浩樹先生，菊田悠氏は本論の執筆の契機となる「ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用」研究会の特集を企画してくださり，中谷文美先生は研究会でコメンテーターとして有益なご意見をくださった。ここに記して心からの謝意を表する。

## 注

1）ポスト社会主義人類学の成果については，2000年にウルフェが英語で発表された東欧・旧ソ連圏の研究動向を（Wolfe 2000），2002年までは渡邊が「ユーラシア社会人類学」という名称でポスト社会主義時代の英語・日本語論文を網羅的にサーヴェイしているので（渡邊 2002），全体的傾向はそちらを参照のこと。

本論に関連する旧ソ連領中央アジア５ヶ国（ウズベキスタン，タジキスタン，カザフスタン，クルグズスタン，トルクメニスタン）で体制転換の影響について扱った初期の主要な人類学研究（日本語及び英語）は，カザフスタンの集団農場の変動を描いたワーナー（1994）を端緒に，1998年『中央アジア・サーベイ』（*Central Asian Survey*）誌で組まれた「市場経済化――ポスト・ソビエト中央アジアにおける社会の転位と生存」の特集論文（Kandiyoti 1998；Mandel 1998；Koroteyeva and Makarova 1998；Werner 1998；Kuennast 1998）及び，クルグズスタンの親族に注目した吉田（2004），ベルグ（2004）がある。これらの一連の研究は，体制転換という社会変動に際して，人々が形成するローカルなネットワークとその活用から分

析する傾向がある。一方，菊田（2005a；2005b），和崎（2007）の研究は陶業職人や乞食といったある特定集団に注目することで体制転換の経験を描き出す。アブラムソン（2004），藤本（2005）のようにジェンダーから体制転換を描き出す研究成果もある。近年では，2006年『中央アジア・サーベイ』誌で特集された「ポスト・ソビエトのイスラーム ── 人類学的視座」の諸論文に代表されるように，中央アジアのイスラームをミクロなレベルで理解することで体制転換と人々の宗教観への影響を考察する研究が多数を占める（Schoeberlein 1999，2001；Rasanayagam 2006；Abashin 2006；Kehl-Bodrogi 2006；Louw 2006）。

本論と関わりが深いのは，中央アジアにおける女性の商業活動を分析したワーナー（2004）の研究，集団農場における経営の私有化概念の再検討を行ったジェンダーの視点から分析したシュリーブスの研究（Shreeves 2002），ウズベク式食事法ともてなしや肥満の関係を論じたザンカの研究（Zanca 2003；2007）である。特にシュリーブス論文が収められた『市場とモラリティ ── ポスト社会主義の民族誌』の論集は，ポスト社会主義圏における体制転換後の経済活動をミクロなレベルから分析し，経済活動を支える地域特有の道徳観念を描き出す試みである。

2）「ものづくりの人類学」を提案する田口によれば，1980年代のミラーやアパドゥライの研究以降，人類学における物質文化研究は変化したという。彼らが目指す「モノ」研究の特徴は，「モノの体系の独自性を理解し，モノの集合の中に現れる様々な社会関係や相互交渉へと視野を広げていくことから，モノと人，さらにはモノと「社会」の相互作用を扱う」であるという（田口 2002：2）。田口は彼らがとった研究手法をカタカナでモノ研究と表記しており，本論文もその用法を踏襲する。

3）例外はザンカの研究（Zanca 2003；2007）である。彼は食べ物というモノを通じて，人々が守る礼儀作法・文化的意味合い，価値観に注目した研究手法を取る。もっとも彼の研究は経済活動とモノの関連には言及されていない。

4）本論で扱うウズベキスタンの刺繍に（狭い意味での商品化である）商品開発がなされる過程について詳しくは（今堀 2006b）を参照。本論では商品開発の過程は直接事例として取り上げない。

5）ウズベク語表現の「カシュタを繍（ぬ）う（カシュタ・ティキッシュ，kashta tikish/u）」の訳語として繍いの字を当てる。ウズベク語では仕立で「縫うこと」と「刺繍すること」には同一動詞のティキッシュが用いられ，言葉としての連続性を表現するためである。日本刺繍でも「繍い」という表現を用いることに関しては平野（1987）を参照。尚，ウズベク語は（/u），ロシア語は（/r），アラビア語は（/a）で示す。ウズベク語には多数のアラビア語・ペルシア語起源の単語があるが，ウズベク語の文脈で使われる場合は（/u）で示した。

6）ザクス（Zapisi Aktov Grazhdanskogo Sostoyaniya/r，戸籍登録）。

7）結婚には仲人の交渉，婚約，家（娘）の下見，ファーティハ式（fotiha/a，花嫁側親族と花婿側親族の初顔合わせ），式日取りの公開，娘たちがピラフを作る（娘たちが合議する）日，ニカーフ式（nikoh/a，契約式），披露宴，花嫁の家入，花嫁挨拶（ケリン・サローム，kelin salom/u），花嫁のお披露目式，舅招待式がある（O‘ME 2003：356）。現在，上記の儀礼が全て行われる訳ではないが，仲人の交渉，ファーティハ式，ニカーフ式，披露宴，花嫁挨拶，花嫁のお披露目式は多様性を含みつつウズベキスタン各地で行われる。

8）この贈物はファーティハ式の際に花婿が花嫁本人及び，花嫁の両親に贈られるものであり，カリンとは区別される。

9）ミシン刺繍はチェーンステッチ刺繍専用ミシンで刺繍を施す。ミシン刺繍について述べたモロゾヴァは刺繍用ミシンのことをポポップ（popop/u）と述べているが，その語源は明らかではない（Morozova 1960：11）。ブハラ州では一般にミシン刺繍のことをパットドゥズ（patdo‘z/u）

と呼んでいた。また，ロシア語でチェーンステッチを意味するタンブール（tambur/r）と呼ばれることもある。統一された名称がないことから本論ではミシン刺繍と日本語訳のみで記載する。カシュタでチェーンステッチを施すことが盛んだったブハラ州には，ミシン刺繍は最も遅い時期に普及した（Morozova 1960：21）。

10）金糸刺繍は使用する糸の種類が金銀糸で，布地に配置した型紙を覆う技法を用いることが特徴である。型紙の使用から手入れが困難で汎用性に欠けるため，儀礼用服飾品に適する。金糸刺繍はブハラ・ハーン国，特にマンギト朝（1785～1920年）君主の宮廷着衣だったため（Goncharova 1986：8），特にブハラとの結びつきが強い。金糸刺繍が「民族文化」としてブハラで選好される経緯に関しては別稿を準備中である。

11）筆者のウズベキスタン留学期間は，2002年２月～2004年６月までの約２年４ヶ月間，及び2006年１～３月の２ヶ月間である。その中でショーフィルコーン地区の集中調査期間は１年間（2002年10月～2003年９月）である。

12）ジェトロ（JETRO）統計によると，2001年は闇レートと公定レートの乖離が最も激しかった時期であり，公定レート（平均）では１米ドルが428スムであったのに対し，闇レートでは１米ドルが1,500スムとなっている。後に2003年末以降，公定レートと闇レートの差が解消され，１米ドルが1,000スム程度に設定された。本論では2001年度の米ドル換算のみ，闇レートの1,500スムを用い，後の換算レートは１米ドル1,000スムを用いる（JETRO 2008）。尚，ショーフィルコーン地区の統計資料2005年度版には平均収入を示す統計が削除されていたため2002年度版を用いた。継続して行った筆者の聞取りでは，数度に渡り発令された公務員給与を引き上げる大統領令により，人々の平均収入は大幅に上昇していた。一例として，2007年の地区の学校教師（役職付）の給与は約60米ドル（約7,000円）であった。

13）調査地の選定にはブハラ市内の博物館で得たカシュタ制作者とその活動に関する情報に基づいている。

14）地区でカシュタは女性の仕事と見なされている。織布や下絵描きなどのカシュタ関連業，カシュタ販売業で従事する男性もいるが，男性で事業家や繍い子をするのは非常に珍しい。むしろ事業の補助的役割を担当する（今堀 2007）。

15）調査方法はショーフィルコーン地区村落部の女性達に結婚及び彼女達が目にした結婚式の持参財の刺繍装飾方法について，１対１の対面インタビュー方法，複数の女性達が集まる場で話し合うグループ討論形式，及び筆者が訪れた世帯で刺繍品を見せてもらい聞取り調査した情報をまとめた形で結婚年代別毎に整理をした。本調査方法では限られた人数（50人程度）の情報しか集まらなかったため，今後引き続き精密な調査を行う予定である。

16）1998年10月28日付ウズベキスタン共和国大統領令（PF-2100）。詳しくはダダバエフ（2006：116）を参照。

17）1997年に出された大統領令「国民芸術的工芸技能及び応用芸術発展に向けた国家支援について」（Xalq Badiy Hunarmandchiliklar va Amaliy San‘atini Yanada Rivojlantirish Davlat Yo‘li Bilan Qo‘llab Quvatlash Chora Tadbirlari To‘grisida/u）の発令以後，工芸家の所得税免除など様々な優遇政策が採られた。

18）ショーフィルコーン地区では筆者が調査地区を離れた2004年以降カシュタチが急増した。2006年の追加調査時点で特に有名となった新規カシュタチ５人から聞取り調査を実施した。新規カシュタチの１人は，彼女の村で2004年から2006年にかけて増えたカシュタチは55人に及ぶという。筆者はその全てを網羅することは出来なかったが，彼女達は繍い子を経て自らの布地と糸を用意し，数枚販売しただけの家内制作者も多い。

19）筆者が2004年にウズベキスタンから帰国する直前に彼女は資金不足から倒産を余儀なくされた。
20）文中の人物名は全て仮名である。
21）それぞれの技能を個人的に用いない理由について自由回答形式で収集した。自由回答のため表には組み込まれていない。
22）カシュタ繍い子は金糸刺繍や仕立ての針子の技能も習得する者も多い（今堀 2006a：132）。
23）祭日の項目には，新年（yangi yil/u），ナウルーズ（navro‘z/u，春分の祝祭），イスラーム諸儀礼（hayitlar/u），その他の祝事には，揺りかご儀礼（beshik to‘y/u），割礼（sunnat to‘y/u），還暦（nafaqa to‘y/u）が含まれる。
24）アンケート調査票を作成した2002年の段階で，筆者はショーフィルコーン地区のカシュタ制作に占める民族文化の重要性を十分に認識できず，むしろ伝統（an‘ana/u，アナナ）概念に注目していた（そのため選択肢を民族伝統にした）。だがカシュタ制作者の内，非常に知識あるカシュタチからたった2回聞いたのみで，多くのカシュタ制作者達は伝統という言葉を用いず，民族的，古い（eski/u，エスキ）を何度も口にした。旧ソ連地域における民族文化については（渡邊 1991；田中 2001）に詳しい。
25）例外はカシュタ販売ビジネスである。カシュタ制作は女性の仕事といえるが，それを運び，店舗で販売するビジネスに従事するのは圧倒的に男性が多数を占める。

## 文　献


Abashin, S.
2006 The Logic of Islamic Practice: a Religious Conflict in Central Asia. *Central Asian Survey* 25 (3): 263–286.

Abramson, D.
2004 Engendering Citizenship in Postcommunist Uzbekistan. In C. Nechemias and K. Kuehnast（eds）*Post-Soviet Women Encountering Transition: Nation-Building, Economic Survival and Civic Activism,* pp. 65–84. Washington, D. C.: Johns Hopkins University Press.

Akiner, S.
1997 Between Tradition and Modernity: the Dilemma Facing Contemporary Central Asian Women. In M. Bruckley（ed.）*Post-Soviet Women: from the Baltic to Central Asia,* pp. 261–304. Cambridge: Cambridge University.

アーリ，J.
1995 『観光のまなざし――現代社会におけるレジャーと旅行』（りぶらりあ選書）加太宏邦訳，東京：法政大学出版局。

青柳真智子
1981 「婚資と持参金――結婚が成立するためのてつづきともの」『季刊民族学』5（2）：68–74。

Appadurai, A.
1986 Introduction: Commodities and the Politics of Value. In A. Appadurai（ed.）*The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective,* pp. 3–63. Cambridge: Cambridge University Press.
2001 （ed.）*Globalization.* Durham and London: Duke University Press.

Berg, A.
2004 Two Worlds Apart: The Lack of Integration between Women's Informal Networks and Nongovermental Orgazation in Uzbekistan. In C. Nechemias and K. Kuehnast (eds) *Post-Soviet Women Encountering Transition: Nation-Building, Economic Survival and Civic Activism,* pp. 195–216. Washington, D. C.: Johns Hopkins University Press.
Bo'riev, O. and I. Xojamurodov.
2006 *O'zbek xalgining boqiy qadriyatlari*. Toshkent: Qarsh Nasaf.
Chepelevestkaya, G. A.
1961 *O'zbekiston So'zanasi*. Toshkent: O'zSSR Davlat Badiiy Adabiyoti Nashriyoti.
ダダバエフ，T.
2006 『マハッラの実像――中央アジア社会の伝統と変容』東京：東京大学出版会。
ダリッシュ，P.
1995 「来世のために装う――ザイールのクバ人のラフィア織物の生産と使用」佐野敏行訳，A. ワイナー，J. シュナイダー編『布と人間』pp. 183–216，東京：ドメス出版。
Davenport, W. H.
1986 Two kinds of value in the Eastern Solomon Islands. In A. Appadurai (ed.) *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective,* pp. 95–109. Cambridge: Cambridge University Press.
藤本透子
2005 「あるインテリ女性の子育て――ソ連時代からカザフスタン独立後の変動のなかで」『沙漠研究』14 (4)：231–246。
Goody, J. R.
1973 Bridewealth and Dowry in Africa and Eurasia. In M. Fortes et al. (eds) *Bridewealth and Dowry* (Cambridge Paper in Social Anthropology 7), pp. 1–58. Cambridge: Cambridge University Press.
Goncharova, P. A.
1986 *Buxoro Zardo'zlik San'ati*. Toshkent: G'afur G'ulom nomidagi Adabiyoti.
Gul, E.
2002 Shahrisabz Kashtalari. *San'at* 1: 14–18.
平野利太郎
1987 『日本の刺繍』東京：雄鶏社。
Hirsch, F.
2005 *Empire of Nations: Ethnographic Knowledge and the Making of the Soviet Union.* New York: Cornel University Press.
今堀恵美
2006a「ポスト・ソビエト期におけるカシュタ（刺繍）制作と副業――ウズベキスタン・ブハラ州ショーフィルコーン地区の事例から」『日本中東学会年報』21 (2)：113–140。
2006b「市場経済におけるカシュタチ（刺繍屋）事業の誕生――ウズベキスタン・ショーフィルコーン地区の事例から」『社会人類学年報』32：57–84.
2007 「ウズベキスタンの刺繍制作から見る『女の仕事』と家族主義」『アジア女性研究』16：145–148。

JETRO
2008（更新年）「タシケントにおける消費物資価格，各種サービス価格，対ドル交換レートの推移」Internet, 21th May 2008,（http://www.jetro.go.jp/biz/world/russia_cis/uz/others/uzprice0712.pdf）
Jumaev, Q. J.
2003 19*asr ohari* 20*asr boshlarida Buxoroning An'anaviy Kashtado'zlik San'atida*. Nashriyotlanmagan Ilmiy Nomzodlik Dessertastiya. Toshkent: O'zbekiston Badiy Akademiyasi San'atshunoslik Ilmiy Tadqiqot Institut.
Kamp, M.
2006 *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*. Seattle and London: University of Washington Press.
Kandiyoti, D.
1998 Rural Livelihood and Social Networks in Uzbekistan: Perspectives from Anjijan. *Central Asian Survey* 17（4）: 561–578.
Kehl-Bodrogi, K.
2006 Who Owns the Shirine? Competing Meanings and Authorities at a Pilgrimage Site in Khorezm. *Central Asian Survey* 25（3）: 235–250.
菊田悠
2005a「変化の中の『伝統』解釈と実践――ポスト・ソビエト期ウズベキスタンの陶工の事例より」『アジア経済』46（9）：42–61。
2005b「ソ連期ウズベキスタンにおける陶業の変遷と近代化の点描」『国立民族学博物館研究報告』30（2）：231–278。
Koroteyeva, V. and E. Makarova.
1998 Money and Social Connection in the Soviet and Post-Soviet Uzbek City. *Central Asian Survey* 17（4）: 579–596.
Louw, M.
2006 Pursuing 'Muslimness': Shrines as Sites for Moralities in the Making in Post-Soviet Bukhara. *Central Asian Survey* 25（3）: 319–339.
Mandel, R.
1998 Structural Adjustment and Socap Opera: a Case Study of a Development Project in Central Asia. *Central Asian Survey* 17（4）: 629–638.
Mandel, R. and C. Humphrey（eds）
2002 *Markets and Moralities: Ethnographies of Postsocialism.* Oxford and New York: Berg.
Morozova, A.
1960 *O'zbekistonda Yo'rmado'zlik.* Toshkent: Davlat Badiiy Adabiyoti Nashriyoti.
中谷文美
2003 『「女の仕事」のエスノグラフィ――バリ島の布・儀礼・ジェンダー』京都：世界思想社。
西村祐子
1994「投資としての花嫁持参財――南インド・ナガラッタール・カーストの婚姻」『民族學研究』59（1）：28–53。

Oliver, R.
2000 *The New Central Asia: The Creation of Nations.* New York: New York University Press.
大塚和夫
1985 「下エジプトのムスリムにおける結婚の成立過程――カリュービーヤ県ベンハー市とその周辺農村の事例を中心に」『国立民族学博物館研究報告』10（2）：273-307。
O'zbekistan Milliy Enstiklopodiyasi（O'ME）
2003 *O'zbekiston Milliy Enstiklopodiyasi.*（jeld 6）Toshkent: Davlat Ilmiy Nashriyoti.
Rasanayagam, J.
2006 Healing with Spirits and the Formation of Muslim Selfhood in Post-Soviet Uzbekistan. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 12: 377-393.
Sidorenko, A. I., A. R. Arykov, and R. R. Radjabov.
1981 *Zolotoe Shitie Bukhari*. Tashkent: Izdatel'stvo Literaturi i Iskustva Imeni Gafura Gulyama.
Schoeberlein, J.
1999 Central Asian Studies in an International Context. In B. Schlyter and M. Juntunen (eds) *Re-entering the Silk Routes: Current Scandinavian Research on Central Asia,* pp. 23-44. London and New York: Kegan Paul International.
2001 Islam in the Ferghana Valley: Challenges for New States. In H. Komatsu and S. Dudoignon（eds）*Islam in Politics in Russia and Central Asia, Early Eighteenth to Late Twentieth Centuries,* pp. 323-339. London and New York: Kegan Paul International.
スコット，J.
1999 『モーラル・エコノミー――東南アジアの農民叛乱と生存維持』高橋彰訳，東京：勁草書房。
Shofirkon Tuman Xokimligi Iktisodiyoti va Statistika bo'lim（Shofirkon Statistika）
2002 *Buxoro viloyati Shofirkon Tumani Pasport*. Shofirkon Shahar.
2005 *Buxoro viloyati Shofirkon Tumani Pasport*. Shofirkon Shahar.
Shreeves, R.
2002 Broadening the Concept of Privatization: Gender and Development in Rural Kazakhstan. In R. Mandel and C. Humphrey（eds）*Markets and Moralities: Ethnographies of Postsocialism,* pp. 211-235. New York: Berg.
Sodiqova, N.
2003 *O'zbek Milliy Kiyimlari:* 19-20asrlar. Toshkent: Sharq nashriyoti.
Sukhareva, O, A.
1937 K Istorii Razvitiya Samarkandskoi Dekorativnoi Vyshivki. *Literatura i Iskustvo Uzbekistana* 6: 119-134.
1948 Xudozhestvennye Remesla Uzbekistana. *Zvezda Vostoka* 19, 108-117.
1983 Ornament Dekorativnyx Vishivok Samerkanda i evo Svyaz' s Narodnymi Predstavleniyami i Verovaniyami poloviny 19-nachale 20 vv. *Sovetskaya Etnografiya* 6: 67-78.
2006 *Suzani: Sredneaziatskaya Dekorativnaya Vyshivka.* Moskva: Izdatel'skaya Firma Vostochnaya Literatura RAN.

田口理恵
2002 『ものづくりの人類学――インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』東京：風響社。
Tambiah, S. J.
1973 Dowry and Bridewealth, and the Property Rights of Women in South Asia. In M. Fortes et al. (eds) *Bridewealth and Dowry* (Cambridge Paper in Social Anthropology 7), pp. 59–169. Cambridge: Cambridge University Press.
1989 Bridewealth and Dowry Revisited: The Position of Women in Sub-Saharan Africa and North India. *Current Anthropology* 30 (4): 413–435.
田中克彦
2001 『言語から見た民族と国家』(岩波現代文庫学術 63) 東京：岩波書店（初出は1978年)。
Tarasov, A.
1957 Narodnye Vyshivki Bukhary. *Dekorativnoe Iskusstvo SSSR* 10: 58–59.
1958 Dekorativnaya Vyshivka v Ubranctve Zhilishch Narodov Uzbekistana. *Voprosy Dekorativnovo Iskusstva (Trudy Moskovskovo vysshevo khudozhestvenno-Promyshlennovo uchilishcha.)* 1: 22–40.
和崎聖日
2007 「ポスト・ソビエト時代のウズベキスタンの「乞食」――都市下位文化におけるイスラームと共同性」『文化人類学』71 (4): 458–482。
渡邊日日
1999 「ソビエト民族文化の形成とその効果――「民族」学的知識から知識の人類学へ」『旧ソ連・東欧諸国の20世紀文化を考える』(スラブ研究センター研究報告シリーズ64) pp. 1–31, 札幌・北海道大学スラブ研究センター。
Werner, C.
1994 A Preliminary Assessment of the Attitudes toward the Privatization of Agriculture in Contemporary Kazakhstan. *Central Asian Survey* 13 (2): 295–304.
2004 Feminizing the New Silk Road: Women Traders in Rural Kazakhstan. In C. Nechemias et al. (eds) *Post-Soviet Women Encountering Transition: Nation-Building, Economic Survival and Civic Activism,* pp. 105–126. Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press.
ワイナー，A.，J. シュナイダー編
1995 『布と人間』佐野敏行訳，東京：ドメス出版。
Wolfe, T. C.
2000 Cultures and Communities in the Anthropology of Eastern Europe and the Former Soviet Union. *Annual Review of Anthropology* 29: 195–216.
Yunusova, N. Z.
1986 Suzani Khodzhenta-Leninabada. In N. Negmatov (ed.) *Issledovaniya po Istorii I Kuliture Leninabada,* pp. 214–222. Dushanbe: Izdatel'stvo Donish.
Zanca, R.
2003 "Take! Take! Take!" Host-Guest Relations and All That Food: Uzbek Hospitality Past and Present. *The Anthropology of East Europe Review* 21 (1): 8–16.
2007 Fat and All That: Good Eating the Uzbek Way. In J. Shadeo and R. Zanca (eds) *Everyday Life in Central Asia: Past and Present,* pp. 178–197. Bloomington: Indiana University Press.

## 【付録】 ショーフィルコーン地区持参財一覧（2006年４月結婚）

| 現地語名称 | 日本語訳 | 工芸種類 | 制作者 | 入手方法 | 購入者 | 購入年 | 値段(単位スム) | 数 | メ　モ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| йилпигич | うちわ | 金糸刺繍 | 近隣女性 | 直接注文 | 花嫁本人 | 2004 | 1000 | 1 | |
| дастурхон | 食布 | 金糸刺繍 | 近隣女性 | 直接注文 | 花嫁本人 | 2005 | 3000 | 1 | |
| zarpocha | ズボン | 金糸刺繍 | — | 贈り物 | 花婿側親族 | 2005 | 6000 | 1 | ファーティハ式の贈り物 |
| рўмолча | スカーフ（小） | 金糸刺繍 | 近隣女性 | 直接注文 | 花嫁の妹 | 2004 | 1000 | 1 | |
| сачок | タオル | — | — | 市場購入 | 父，隣人 | 2002～2005 | 大2000 小1000 | 大3 小4 | 大の内の一つは贈り物 |
| халат | 女性用上着 | 金糸刺繍 | 花嫁の母親 | 刺繍入りの布地を市場購入後，仕立て | 花嫁の母親 | 2003 | 35000 | 1 | |
| халат | 女性用上着 | 紅ビロード地 | — | 直接注文 | 花嫁の母親 | — | — | 1 | |
| халат | 女性用上着 | 部屋着用 | — | 贈り物 | 花婿側親族 | — | — | 1 | ファーティハ式の贈り物 |
| халат | 女性用上着 | ビロードに金糸入の生地 | — | 贈り物 | 花婿側親族 | — | — | 1 | ファーティハ式の贈り物 |
| nimcha | ベスト | ビロードに金糸入の生地 | — | 贈り物 | 父方叔父の妻 | — | — | 1 | 短 |
| nimcha | ベスト | キルト | 花嫁の母親 | 家にあった布地から仕立て | 花嫁の母親 | 1995 | — | 1 | 長 |
| ойна халта | 鏡入れ | 金糸刺繍 | 近隣女性 | 直接注文 | 花嫁本人 | 2005 | 1000 | 1 | |
| чойнакпўш | ティーポット・カバー | 金糸刺繍 | 近隣女性 | 直接注文 | 花嫁本人 | 2003 | 500 | 1 | |
| кўйлак | ワンピース | ハーンアトラス | 針子 | 布地を購入，仕立て | 花嫁の母親 | 2002 | 3000/1m | 1 | 2m 購入 |
| кўйлак | ワンピース | 仕立て | 針子 | 布地を購入，仕立て | 母方叔父の妻 | — | — | 1 | |
| кўйлак | ワンピース | 仕立て | 針子 | 直接注文 | 花嫁本人 | — | 2500/1m | 4 | 2m 購入 |
| кўйлак | ワンピース | — | — | — | 花嫁本人 | 2005 | 5000 | 1 | |
| тапочка | スリッパ | — | — | 市場購入 | 花嫁本人 | 2004 | 3500 | 1 | |
| qarush | 黒靴 | — | — | 贈り物 | 花婿側親族 | 2005 | — | 2 | ファーティハ式の贈り物 |
| махси | 長靴 | — | — | 贈り物 | 花婿側親族 | 2005 | — | 1 | ファーティハ式の贈り物 |
| камнашка | シミーズ | — | — | 市場購入 | 花嫁本人 | — | 1000 | 2 | |
| рўмол | スカーフ | — | — | 市場購入 | 花嫁本人，花嫁の母 | — | — | 15 | |
| белбоғ | 腰巻き | ミシン刺繍 | 近隣女性（ミシン刺繍専門職） | 直接注文 | | 2006 | — | 2 | 花婿用及び舅用の２枚 |
| газлама | 布地 | — | — | 市場購入 | 花嫁の母親 | — | — | 2 | |
| газлама | 布地 | — | — | 贈り物 | | — | — | 1 | 叔父の奥さんから贈り物 |
| hamkartirish | 四角の布地 | パッチワーク | — | 仕立て | — | — | — | 1 | 花婿の家に入る時，イーストをこの布に包み，脇の下に入れてベールに隠して持ち込む。 |
| чойхалта | 茶葉入れ | パッチワーク | — | 仕立て | — | — | — | 1 | 子孫繁栄のために８つの卵を入れ，チミルディック（結婚カーテン）の儀礼で用いる |
| сўзана | 布団台カバー | 仕立て | 近隣女性 | 贈り物 | — | — | — | 1 | 刺繍入りではない。ここでは単に布団台カバーにかける布地をスザナを呼ぶ |
| bistarpich | 新婚用シーツ | ミシン刺繍 | 近隣女性（ミシン刺繍専門職） | 仕立て | — | — | — | 1 | |
| жойнамоз | 礼拝用敷物 | ミシン刺繍 | 近隣女性（ミシン刺繍専門職） | 直接注文 | 花嫁本人，花嫁の母 | 1999，2004 | 1500，2000 | 2 | 一枚は部屋を装飾する。一枚は舅用（普通の綿布に施す），結婚式の明くる朝，ケリン・サロームの時に腰巻きとともにプレゼントする。 |
| кўрпа | 敷き布団（大） | 仕立て | 花嫁の母親，妹及び近隣女性 | 仕立て | — | — | — | 3 | |
| кўрпа | 敷き布団（小） | 仕立て | 花嫁の母親，妹及び近隣女性 | 仕立て | — | — | — | 2 | |
| кўрпача | 掛け布団，もしくは座布団 | 仕立て | 花嫁の母親，妹及び近隣女性 | 仕立て | — | — | — | 6 | |
| болинча | クッション，（枕）カバー | 仕立て | 花嫁の母親，妹及び近隣女性 | 仕立て | — | — | — | 12 | |
| чапон | 冬用長衣 | 仕立て | — | — | — | — | — | 1 | 花婿用 |
| игнапалак | 針山 | | 近隣女性 | 贈り物 | 隣人 | 2005 | — | 1 | |
| jerob | 靴下 | — | — | 市場購入 | 花嫁本人，花嫁の母 | — | — | 11 | 花嫁用10枚，花婿用1枚 |
| даст рўмол | ハンカチ | — | — | 市場購入 | 花嫁本人，花嫁の母 | 2005 | — | 4 | 花婿の甥や姪等，子供へプレゼント用 |
| сабон | せっけん | — | — | 市場購入 | 花嫁本人 | 2005 | — | 5 | |
| мочалка | ボディ・スポンジ | — | — | 市場購入 | 花嫁本人 | 2005 | — | 1 | |
| тарок | くし | — | — | 市場購入 | 花嫁本人 | 2005 | 400 | 1 | |
| атир | 香水 | — | — | 贈り物 | 花婿側親族 | | — | 2 | ファーティハ式の贈り物 |
| лак | マニキュア | — | — | 贈り物 | 友人 | 2006 | — | 1 | |
| помада | 口紅 | — | — | 市場購入 | 花嫁本人 | 2005 | 600，1200 | 2 | |
| қалам | 紅筆 | — | — | 市場購入 | 花嫁本人 | — | — | 1 | |
| загорка | 髪飾り | — | — | 贈り物 | 花婿側親族 | — | — | 2 | ファーティハ式の贈り物 |
| клем | 化粧クリーム | — | — | 市場購入 | 花嫁本人 | 2005 | 200 | 1 | |
| лоли | 菓子盆 | — | — | 市場購入 | 花嫁母 | 2005 | 2200 | 1 | |
| труска | パンツ | — | — | 市場購入 | 花嫁本人，花嫁の母 | — | — | 11 | 一枚は隣人の贈り物。 |
| пояс | ガードル | — | — | 市場購入 | | — | — | 2 | |
| халқа | ピヤス（金） | — | — | 贈り物 | 花婿 | 2006 | — | 1 | 花婿のプレゼント |
| товоқ | 皿（大） | — | — | 市場購入 | — | — | — | 3 | |
| товоқ | 皿（小） | — | — | 市場購入 | — | — | — | 10 | |
| кошиқ ва вирка | スプーン・フォークセット | — | — | 市場購入 | — | — | — | 10 | |
| бахкўйлак | 白いワンピース | — | — | 贈り物 | 花婿側親族 | — | — | 1 | 披露宴終了後花婿の家に入る時に着用。 |
| узук | 指輪（金） | — | — | 贈り物 | 花嫁兄 | 2006 | — | 1 | 結婚式当日に兄から贈り物 |

※聞き取りは2006年１月30日に，花嫁（1985年生）及び花嫁の母親や姉妹の前で実施。その後，電話による補足情報が加わっている。
※ウズベク語及びロシア語キリル文字表記，タジク語方言　ラテン文字表記
※値段は購入当時の価格を表記
※—はデータなし，もしくは工場既製品
※購入者は出資者と異なる場合もある。花嫁の母が購入した場合でも，出資者は花嫁の父という場合である。尚，聞き取りでは2003年から花嫁本人が地区の図書館員として勤務をしており，花嫁本人が購入した品物は彼女の収入から購入した品物が多い。
※現在，調査地区ではスザナという布地は布団台カバーとして用いられることが多い。壁掛けとしての絨毯の一般化が原因と言われる。